

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	蓬萊（一幕）：文苑
Author(s)	海燕子
Citation	龍南會雜誌， 1 4 4： 4 9 - 6 1
Issue date	1912-02-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6287">http://hdl.handle.net/2298/6287</a>
Right	

蓬

萊

(一幕)

海 燕 子

登場人物

徐 福 秦始皇帝の臣下

李 鳳 第一の童男

崔 玉 第二の童男

劉華鬢 第一の童女

其他童男、童女各一名。外に登場せざる崔玉の戀人 玉翡翠。

時。支那古代

所。支那大陸東方なる洋上の船中。

舞臺上手奥の方より、中央六分位迄斜に、大型なる古代支那軍船の艫部を現す。見上る許りなる舷側は銅板銅鋳を以て嚴めしく装ひあり。舷上堆朱金装の欄干見ゆ、後檣より前方、舳の部分は背景と合す。他は一面洋心の光景、碧空と綠波。雲なく微風波靜かに、落日に近し。第一の童男李鳳、第一の童女劉華鬢、共に齡十七位、支那古代の美装を凝らす。相並びて登場、右舷なる金装

の朱欄に倚る。

第一の童男。あゝ今日も亦此儘空しく暮れて終ふのか。

第一の童女。朝、浪に洗はれて上つた太陽は、今又浪に洗はれつゝ昨日と同じ道を沈んで行くのです。吾々は一体何時まで全じ日全じ事を繰返さなければ、ならないんでしょうか、何時まで全じ太陽を、全じ浪に迎へて、全じ波に送らなければ、ならないんでしょうか。吾々は何時になれば、陸に照るあの美しい日の光を見る事が出来るのでしょうか。梢の緑に注ぎ、草の緑に落ちて、黄や赤の花に燃ゆる、あの麗な日の光を、果して再眺める事が出来ましょうか。

第一の童男。あゝ吾々は、あの懐しい故里の牧場の光をさへも、もはや憶出せない程、長く海の上に月日を過した。唯何とはなしに懐しい、床しいと云ふ胸の感じだけは溢れる程湧き返つて來ても(短き間)其色、其匂ひ、其暖さを、もはや身にしてみても心に描き出す事も出来なくなつた。如何しても忘れ度くない故里の光を、遂に憶出せない程、既に吾々の航海の月日は重なつたのだ。

第一の童女。吾々が長江の水に舳を揃へて纜を解いたのは、もう何年の昔になつたのでしょうか。

第一の童男。さうな?……(問)……然し吾々は例の通り、徐福大人に唇を禁じられて居るから、無論正確な月日を知る事は出来ないが、其でも尙過ぎ行く其日／＼を、心細かに數へて來た。然し其も遂には數へ切れない程に重なつて、何時とはなしに日の數、月の數も忘れて了つた。

第一の童女。でも、まあ約如何の位になりましたかしら。

第二の童男。纜を解いた頃は、華鬢さんの振分けた髪が、まだ肩にも懸つて居なかつた。其が今は此麼綺麗

な垂髻（たづね）になつて、翡翠の簪に中を止め、紅玉の瓊と、銀釵金簪に左右を飾る様になつたんだもの……た前も、最早小供でなくなつたんだもの……

第一の童女、顔を赤らめて首垂る、二人沈黙、吐息、長き間。やがて第一の童男、朱欄を離れ、童女を中心甲板上の上を歩む。暫時の後又元の位置に復り、小手をかざして落日を望む。

第一の童男。あの日の色を御覽！ あの落日の色を。まるで濁りに濁つた血の色の様だ。

第一の童女、右舷の朱欄を離れて、一時左舷に到る。之も小手をかざして落日を望む。忽ち物に襲はれし如き面持して脚早やに元の位置に立かへり、李鳳の側に前よりも近く身をよせて欄に倚る。

第一の童女。ほんとに嫌な色ですね。静に見て居ると、自（おの）つと魂の底まで蝕み込むやうな色ですね。

第一の童男。あの色は吾々の血潮の色だ。勞れた人々の血潮の色だ。

第一の童女。倦み勞れ傷いた心が、日々に迫り来る運命に脅やかされた時、吾々の美しい魂も何時かあんな色に染まつて、其儘醜く腐つて行くのです、左様です。日に月に其怖しい色を見せて行く、あの落日は確かに吾々の運命を暗示して居るんです。

第一の童男。左様なんだ。ほんとに左様なんだ。（苦しげにあちこち歩む）吾々數十の舳を揃へて長江の水に纜を解いて以來。東の方へ何千日。幾万里を來たんだらうか。然るに尙今となつても、其教へられた蓬萊の島は、必ず在ると教へられ諭され、信じさせられた其蓬萊の島は、影も見えないんだ。斯くて吾々は死に到るまで蓬萊に欺かれて居なければならぬんだらうか。

第一の童女。（垂髻を金の簪の脚にてまさぐりつ、うつむき勝ちに）ほんとに吾々は何時まで欺かれなければ

ば、成らないんでしようか。有ゆる吾々の希望は絶に果てたものではありませんか。もう幾年、幾月になるんでしよう。吾々は餘りに長く吾々自らをも欺きました。

第一の童男。なつかしい長江の水に纜を解き、舳艫相啣んで東を指した數十の友船——同じく多數の童男童女をのせた彼の船は、空の荒れる度に海の狂ふ度に一ッ減り二ッ減り、何時とはなしに皆其影を隠してしまつた。而して残つた此船だけが尙欺れつゝ東へ東へと漂うて行くんだ。あゝ欺れて漂泊の悲しみを重ねるよりは一と思に………(間)

第一の童女。唯一雙殘された此船の中でも、一人死に二人死に、今残つてるのは、徐福様と十二人の舸夫楫取と、童男童女では………(小聲に名を讀みながら、指にて數へ見る。其數の餘り少きに今更打驚き、胸を戰なかせつゝ欄に倚りて首垂る。長き間。日まさに落ちんとて最後の光悲しげに舞臺に照る)。

第一の童男、離れ離れになつたあの幾十の友船は今如何なつて居るんだらう? もう怖らくは………(間)………やはり此船のように、何處かの海の端を東へ東へと漂うて居るんだらうか。否! 否! 徐福様の御船とあつて、一番大きく一番嚴丈に拵へた此船でさへ、彼處に幾度も、沈みかけ破れかけたんだもの(嵐の折を憶出して恐怖の表情)あの多かつた友船の皆が皆までも、如何なりはてたか判然るものか。(又身を打慄ふ)

第一の童女。幾歳と云ふ長い漂泊に、もう一雙も残つて居るものですか。よしや残つて、何處かの海のはてを漂つて居るとしても、如何して人が生き残つて居るものですか、あゝ彼の美しかつた五百の童男童女。花のやうな星のやうな、あの眼醒むる許りの少年少女の幾百が、皆怖しい幻の犠牲になつたのです。

第一の童男、さうだ、さうだ、吾々も斯うしたまう、唯犠牲になる日を待つてゐるんだ。

第一の童女、徐福大人は未だに蓬萊を信じなされて居るんでしようか。始皇帝陛下が信じなされて居る様に、あゝ迄極端に信じてゐるんでしようか。

第一の童男、徐福大人は如何か知らぬ。然し始皇帝陛下は信じなされると云ふよりも、むしろ彼所まで内心の恐怖に追ひやられたんだ。つまり内心の恐怖を道士に巧く利用されたんだ。阿房宮が出来、長城が出来、蜀の棧道が出来ても、魂の内に宮殿が出来ない以上、安心の出来るものではない。有ゆる地上の物は亡びねばならぬ。此恐怖を利用したのが、道士の舌だ。そして吾々無垢の少年少女を東海の底に葬つたんだ。  
(不安の裡に怒りの色烈しく動く)

第一の童女。徐福大人は怖らく今も尚、蓬萊に欺かれて居るのを悟らないでしよう。あ——あ。始皇帝陛下は眞個に抑々の第一歩を誤つて居られます。吾々人間が、吾々自らの胸中に探りもし、求めもしなければならぬ蓬萊を遙々東海の端に求めようとするのは非常な誤りではないでしようか。不斷の靈泉も、不死の靈藥も、自分の魂の底に於てこそ初めて見出し得可き物では無いでしようか。

第一の童男。そうだ。吾々自らの胸の底に、魂の奥に……………

第一の童女。エー。魂の底、胸の奥に。吾々自らの裡に……………

二人無言のまゝ長き間、日既に海の彼方に沈み、背景の上部に僅かなる殘紅を止む。舞臺一面漸次一様に灰色を帯び来る。此時第二の童男上手、後橋の彼方より登場。第一の童男と全様の服裝。瞳を脚下に注ぎて、いと憂はしげに歩み来る。

第一の童女。あ崔玉さま――あの玉翡翠さまの御容態は如何です。

第二の童男（無言）

第一の童女（不安の様子にて）先刻は大分宜しかつた様ですが……如何です唯今は？

第二の童男は之に答へず、尙無言のまゝ歩を移して、第一の童男の側、少し上手の所に止り、朱欄に倚らんとして甲板に躡る。

第一の童女。如何なすつたのです？ 崔玉さん。エッ？ 如何なすつたのです？ 大變血色が不悪い様ですが、ほんとに如何かた有りになつちやありませんか。

第一の童男。（愁はし氣に眉をひそめて）如何したんだ。如何したんだ。翡翠さんの身の上に何か異變でも有つたのぢやないか。

第二の童男、（力なげに面を上げて）あゝもう駄目だ。もう絶望だ。有ゆる望み、有ゆる光は、地に落ちて碎けた。力の源、生命の源は、もう悉く碎けたんだ。

第一の童女、ではあなたの翡翠さまが？ もう何にも出来なくなつたのですか、もう、

第一の童女と童男上手の方へ走せ行かんとす。第二の童男、急ぎ後を追ひて、是を押し止む。

第二の童男、もう駄目です、美しかつた私の翡翠は、冷い運命の手に碎かれんとして居るんです。否もう碎かれたんです。傷はれたんです、昨日まで、美しかつた者、みやびやかであつた者が、刻一刻と傷はれ、苦しめられて、いたましく變つて行くのを見ずに置いて下さい。（間）

二人立止り、又踵を返して、元の位置に立かへり三人相並んで朱欄に倚る。

第二の童男。あゝ私の蓬萊は今日唯今永遠に失はれて了つたのです。海の東の蓬萊は信じる事は出来ません、不老不死の靈藥と、不斷不滅の靈も、信じるわけには行きません。唯私はあの麗しい乙女の、崇高い胸の中に秘められた蓬萊を、私の生命、私の魂から厚く信じて居ました。其信じて居るもの、私の生命の源、力の源が、今眼の前に失はれて行くのを見ては、もう如何しても堪へられません。(間、頻に身を悶ゆ)あゝ私の蓬萊には熱い血潮、燃ゆる魂もありません。そして残された私は……空しき影を抱いて、空しき姿に生きるよりは、他に何の途も無くなりました。

第一の童男、あゝあの怖しい蓬萊は、もう幾十人、幾百人と吾々の友を犠牲に奪つて來つたが、今や遂にあの世にも美しい玉翡翠さんをも、冷い腕に奪ひ去つたのだ。斯くても尚吾々を欺うとして居るんだ。飽くまで欺き陥れようとして居るんだ。あゝ吾々はもはや各自の運命に用意をす可き時が來たんだ。

第一の童女、そうです、吾々は有ゆる意味に於て用意をす可き日が來たのです。あゝ明日か、明後日か、何時か其裡には、少女の若い誇りを込めた。此髮此瞳此血潮……有ゆる物を運命の前に捧げねばならぬ時が來るんです。そして吾々を欺いた蓬萊に嘲けられなければならぬ時が來るんです。……(間)……それにしても、あゝ今一と目、翡翠さまにわ目に懸り度いものですが。

第二の童男。それ丈は、それ丈は止しなさい。もう美しい者は去つたのです、みやびやかであつた者、崇高かつた者は永久に去つたのです、残されたのは唯、美しい面影と、荒みはてた私の魂とです。昨日まで美しく燃えて居た二つの魂は、今日は二つの死屍、——死んだ死骸と生きた死骸の二つに變りました。そして私の血潮も恐らく後數刻を出ない間に、傷ましく凍へ果て、あの怖ろしい鶏冠石のやうな色に、心の



臟の中で固つたまゝ、魂を打碎く時が来るでしょう。玉翡翠！昨日まで美しかった名は、今は唯傷しい者の名に變りました。そして其傷ましい名が、私の脉絡を走る有ゆる血潮を止め、凍らせて、刻一刻と私の生命を奪ひ行くのです。

第一の童男、あなたを呪ふのは其傷しい名ではない。あなたの戀人を殺したと全じ怖しい運命なのだ。始皇帝の身に食ひ込んで、始皇帝を亡さなければ止まぬ彼の怖しい運命だ。六國を亡したのも、阿房宮を建て、長城を修築したのも、全じあの怖しい運命の呪ひなんだ、斯くて呪ひに呪はれた始皇帝は、十二の金人を鑄つて宮園に置き、更に吾々に不死の靈藥を求めに來さしたのだ。吾々が長江の碧い水に纜を解いた時既に其呪が吾々の船に悉く乗り込んで居たんだ。

第一の童女。あゝ吾々は後からは運命に呪はれながら、前からは蓬萊に欺かれながら、皆相前後して、世界で最悲しいものの犠牲になつて行くのです。あれあの暮れて行く夕空の彩も、其彩を浸たす涙の姿も、ほのかに消に去る雲の色も、凡てが怖ろしい呪の影を宿して居ます。怖しい呪です。灰色の笑ひです。朽葉色のすゝり泣きです。あゝ彼の怖ろしい咀が、吾々の骨髓に喰入つた時、吾々の紅の魂が、地上に落ちて碎けた時、光もなく影もない怖しい浪の底で、「呪ひ」が揚る歡樂の聲が、ごよみを打つて響くでしょう。

三人等しく沈黙、微風時々船上を掠め三人の頭髮物淋しげに搖る。其度に後檣の帆はたゞと遺瀨無氣にはためき、何物かを訴ふるが如し。徐福、他童男童女各一名宛を随へて上手より登場、銀髯胸に垂れて悲しげに風に動く。前の三人同時に恭しく禮をなす。

徐福。(暮れ行く四邊を眺めながら) あゝ悲しかつた傷ましかつた今日の日も、是で漸く暮れたのか。――

(間)——玉翡翠は實に氣の毒な事をした。船中で一番美しかつた面影を、もはや明日からは見る事が出来ないのか。

第一の童女。吾々は何れは相次で、近い裡に同じ途を踏む様に定まつて居るのではないでしようか。

徐福。(愕然として) 何? 同じ途を踏む? 翡翠と全じ途を?

第一の童男。そうです。無論吾々の行く可き途は定まつて居るんです。あの怖い運命の神は、冷い鋼鐵の筆をとつて、「無限」の面に、既に吾々の命數を刻み附けました。唯吾々は其限られた時の來るのを待つ外に、何の途も有りません。

徐福。其は前眞の杞憂と云ふ物ぢや。吾々が目指す蓬萊へ辿り着いた時、其時こそ、眞に始めて運命の神に勝つ事が出来るのぢや。曙の光はのかな紫に搖いで、潮の色も夢の姿に煙る洋中わたなかに、碧瑠璃と珊瑚琥珀に彩られた金殿玉樓の姿が浮び出でた時、其時始めて前達の魂は永遠なる不死不老の流の中はなに入るんだ。其歡び其樂しさを前達は享け入れて味ひ度いと思はないのか。

第一の童男。いゝね。吾々は蓬萊の歡びを味ふの、享け入れるのと云ふ問題は、もう既に通り過ぎました。吾々はもはや蓬萊に欺かれるには餘りに魂の眼が醒め過ぎました。

第一の童女。(徐福に) いゝね。あなた様の魂も既に眼を醒したに違ひありません。それでもあなたは尙自らを欺き、併せて吾々をも欺うとなさるのですか。毎日毎日、吾々の目前で倒れる犠牲者は吾々に何を教へますか、あなたは其でも尙蓬萊を説かうとなさるのですか。

徐福。有ゆる物に犠牲者の出るのは致方のない事ぢや。然し其犠牲の蔭でこそ始めて吾々は更に高い或る

物に達する事が出来るんぢや。

第一の童男。其でも此う云ふ事を御存じですか。高殿の遙かな屋上に置いた承露盤に溜つた玉露を飲めば神仙になれるとは、常に道士の説く所です。

徐福、無論左様ぢや。其が何ぢや。?

第一の童男。所が其玉露を飲んで銅の毒に身を害つて死んだ人でも、やはり神仙の犠牲になつたと云つて、歡ぶ事が出来ましようか。吾々の凡てが相次で犠牲になり了つた時、あなたも舸夫楫取も悉く犠牲になつた時、空しき船丈けが、或は蓬萊の幻の中を漂ふ時が有るかも知れません。其時吾々は何處で歡の盃を舉げる事が出来るでしようか。

一同暫時無言。徐福色青褪めて唇の邊頻に戰く様見ゆ。此時迄朱欄の下に躡り居たる第二の童男、俄に起ちて蒼白の面に腫を怪しく輝かせつゝ蹣跚として徐福の側に到る。

第二の童男。(悲痛に堪へざる聲にて)徐福様。徐福様。あゝ何卒私の蓬萊を返して下さい。何卒もう一度私の蓬萊を私の手に返して下さい。

徐福。何? 前前の蓬萊を返せ? 何んだ。吾々は共に蓬萊を求めればこそ、斯くは遙に海へ出て長い航海を續けて居るんではないか。

第二の童男。否! 否! 私の蓬萊はそんな幻のような夢のような物ではありません、私の蓬萊は一つの確かな實在でした。

徐福。其の様な蓬萊が何處に在るんぢや。

第二の童男。私の蓬萊は死んだ翡翠です。私の魂が住んで居た翡翠の胸の底に在り、翡翠の魂が住んで居た私の胸の底に在りました。翡翠の魂と私の魂とがびつたりと抱き合つて、安らかに住んで居た所に私の蓬萊は在つたのです。翡翠を外にして何處に私の蓬萊が有りますか、私を外にして何處に翡翠の蓬萊が有りますか。其だのに今冷い運命の手は、物悲しくも二つの魂を裂いたのです。運命の手を其處迄誘つて來たのは果して誰の罪でしょうか。

徐福。だから犠牲者は仕方がない。其は悲しくも有り、苦しくもあるだらう。然し其は人力以上なのだから仕方が無い。諦めるより仕方が無いのだ。

第二の童男、諦められる位なら、斯うは悲しみは致しません。諦めようとしても如何しても諦められないのが悲しいのです。あゝ是で私の生命は盡きたのです。私の命の火、魂の焔は消えたのです。斯くて私は獨り物悲しく、自ら我生きた死骸を見守らねばならぬ身となりました。不死の靈藥も不老の靈泉も私には何の値もないのです。否、失はれたる人の子には地上の有ゆる美しきもの、善なるもの、貴きものも何の價値も何の權威も有りません。私の蓬萊が甦らない以上、此生ける死骸は永久に生ける死骸です。

徐福。……………

第二の童男。私の生命が生きたがら失はれた以上、此生ける死骸に何の光も注がず、焔も燃ぬ以上、私は今迄愛した地上の有ゆるものを呪はざるを得ないのです。阿房宮も、長城も、始皇帝陛下も、呪ひます。無論此船も……………此船中の人々をも……………私の此怖しい呪が一團の焔となつて、地上の有ゆるものを焼き盡し碎き亡し了る迄、呪はざるを得ないのです。

徐福。然した前の呪ひの焔が、地上の有ゆるものを亡してもた前の幸福は少しも増す時は来ないに。

第二の童男。勿論さうです。私は私の幸福の爲めに、呪の焔を揚げるものでは有りません。今は唯、不幸！

滅落！ 死！ 是が残された唯一の住家なのです。今吾々の背後には怖しい呪を乗せた運命が 傷しい足音をさせて刻一刻と迫つて来るんです。あれ彼の足音が、あなたにはわ解りになりませんか（烈しく痙攣的に戦きつゝ後を顧る）あの怖しい足音を呪はずに居られましょうか。地上の有ゆるものは、あの怖しい運命の呪が、假に現れた姿なのです。阿房宮の玉樓にも、驪山の花の夢の中にも、皆あの足音が響いて居ます。其を呪はずに居られましょうか。此海の上にも、此船の裡にも、失はれたる私の蓬萊の中にも、否此生ける死骸の中にも、……（間）……あゝ此怖しい足音を聞いてすら、弱い人の子の魂は、刻一刻と打碎かれて行くのです。あの惨忍な運命の呪の牙に懸る前に、自らをすら呪はざるを得ないのです。あゝあの怖しい足音が聞けませんか。愈々早く近附いて来るあの足音が………呪の牙に魂を碎かるゝ前に、自らの手で自らの生ける死骸を葬らなければなりません。呪はれつくした此魂を、此上、此呪の牙に懸けるに忍びません。

徐福。………

第一の童女。其が呪です、既に牙に懸つたのです。

第二の童男。既に呪の牙に？ 怖しい足音が！ あれ血に飢ゑた牙の響が！

第二の童男卒然として倒る。第一の童女是を支へんとして力足らず、共に倒れんとするを、第一の童男危く助けて第二の童男を朱欄に支ふ。

第二の童男。（幻に追はるゝ如き悲しき聲にて）あれ血に濡れた足音が。肉を噛む牙の響が！

周圍の五人無言の裡に、第二の童男瞑目す。日暮れて燐光、物淋しく舷側を打てる波頭に躍る。

(幕)

## 蝸

白

旅人を何かあらむやわれはまた尾ふりて出づる犬をどめぬ。  
少女さぶ耶馬を捨てつも男得たるわが心地して大阿蘇を攀づ。  
大阿蘇に火のあかれども悲みは麓にみちて蝸のなく。  
あてやかに君が笑まひは藝術のかの若々しさにねまざるがごと。  
亡き人の似顔たづねて羅漢寺の五百羅漢の顔しらべする。  
明日ありと心囁く弱き人今日の戦にやぶれける人。  
手を上げてさぶり讀まむも力なし眼のわくの象形の文字。

(かいやられるふるき反古の中より)

## 貢 船

かたばみ

海越ねて高麗よりまゐる貢船百艘春の風に吹かるゝ  
我胸は秋野の水の夕寂ひか映りさゆらぐ影さねあらで  
「追想」は夢の金絲の慄きに性の芽生の陽炎ふ苑か。  
君が魂彩絲どころ薫り來れ奈落に吾を誘ふが如く  
川霧は小女の襟も濡るゝ程燕の袖も香に匂ふ程